

聖書

聖書は、創造者なる神の「知恵、知識、真理の宝庫」

「直ぐな心で（ヨシエル）」、聖書に向かう者は多くの宝を見つけ、何よりも神に出会う

詩篇119：7、エペソ人6：5「真心から」、マタイ13：44-46

しかし、深く知ること「知識」をどれほど積んでも、信じ委ねる「信仰」には至らない

- ②ダイナミックな多角的、立体的構造：背後に神意 [偶然はない]
全聖書の構成の焦点は、人類の救い主イエス・キリスト
- ④聖書自体が成就を証しする真の神の預言：聖書が聖書を解釈
神の約束の確かさ、成就の確かさ（ご自身の言葉に真実な神）
- ⑥究極的に立証される神のすべての言葉
キリストご自身が神のご計画の「しかり」、アーメン

使徒パウロの宣教

その24

『コリント人への手紙第二』6-7章

6章

- : 1「…懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください」（下線付加）：
 - * そのようなことがあり得るだろうか？
 - * 受けた救いをどのように用いるかが、問われる
 - * 主は個々の信徒にご自分の同労者になるようにと招いておられる
- : 2「神は言われます…確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」：
 - * 神の「とき」はいつも「きょう」
 - * 神にお会いできる今、神を求め、思い立った今、行動に移しなさい！
 - イザヤ書55：6
- : 3「私たちは、この務めがそしられないために…人につまづきを与えないようにと」：
 - * 福音宣教において大きな障害の一つは、自称キリスト者の悪い手本
 - * パウロ、キリストの証人として非常に注意深く行動
 - ローマ人14章
- : 4「あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しているのです。すなわち…」：
 - * 私たちの過ちは私たちにとって教訓、私たちの苦難、困難は私たちの信任状、
— 神の同労者としての信任状—
- : 5「また、むち打たれるときにも、入獄にも、暴動にも、労役にも、徹夜にも、断食にも」：
 - * 4-5節で、パウロ、十の試みを列挙—

十の試み

1. 忍耐、過酷な環境 → 秘訣：肯定的に応答する → ヤコブ1：2-4
2. 悩み、圧力下での試み
3. 苦しみ、日毎の困難
4. 嘆き、ギリシャ語では「狭いところ」の意、八方ふさがりの体験
5. むち打ち
6. 入獄
7. 暴動
8. 労役
9. 徹夜、夜を徹する祈り
10. 断食

☆パウロ自身、1. ~10. の状態にあっても、忠実に主に仕えた

聖書

- ：7「真理のことばと神の力とにより、また、左右の手に持っている義の武器により」：
 ＊6、7節は、神の人を特徴づける九つのこと
 ：8-10「また、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたり、好評を博したりする…」：
 ＊8、9、10節では、九つの逆説を列挙
 ＊パウロ、主のための御働き（ミニストリー）に忠実であるために、大きな代価を払った
 ＊代価がどんなに大きくても、キリストのしもべにとってすべてのことは喜び

九つの逆説

1. ほめられ、そしられる
2. 悪評を受け、好評を博す
3. 人をだますように見えるが、真実
4. 人に知られていないようでも、知られている
5. 死にそうでも、生きている
6. 罰せられても、殺されない
7. 悲しんでいるようでも、いつも喜んでいる
8. 貧しいようでも、多くの人を富ませている
9. 何も持たないようでも、すべてのものを持っている

- ：11「…私たちの心は広く開かれています」（下線付加）：
 ＊「成長している」に同じ
 ：12「あなたがたは…制約を受けているのではなく…窮屈にしているのです」（下線付加）：
 ＊両下線部は、同じギリシャ語使用
 →5節の4. 嘆き と同じ語

6：14-7：1、パウロの「前の手紙」か？

→コリント人第一5：9-10

「未信者」（9-10節）と「不信者」（11節）の違いに留意！

- ：14「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません…」（下線付加）：
 →申命記22：10
 ＊くびきは、両者が同じ道を歩むための道具、同じ価値と目標を持つ密接な関係を象徴
 ＊信徒は、キリストの性質と聖さに調和しないものは一切、切り捨てなければならない
 ＊キリスト者の霊的状态は、自身の生活様式に反映される
 ：15「キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう…」（下線付加）：
 ＊ギリシャ語では邪悪、無法の擬人化で「サタン」→申命記13：13

キリストとベリアル

☆聖書、この世の終わりには、ソロモンの平和路線を行く「偽りの教会」が増えることを警告

→テモテ第一1：1-11

教会は、委ねられた信仰の務めを実現させなければならない

☆申命記12：23-25「肉とともにいのちを食べてはならない」

★「血」は「いのち」を象徴、「肉」は「滅びに至るもの」を象徴

→滅びといのちの混合はあり得ない

★コリント第二6：14-16の解釈

†聖い「神の宮」である信徒は不釣り合いなもの、不調和なもので汚されてはならない

†信徒は「不信者」と付き合ってはいけない →コリント人第一5：11

†礼拝は聖く、一致がなければならない

☆申命記13：13「よこしまな者たちが、あなたがたのうちから出て…」（下線付加）は、「ベリアルの子たち」とも訳され、この文脈は偶像崇拜への誘惑を警告

聖書

: 16-17「神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう…彼らと分離せよ…」（下線付加）：

★明確な行為が要求されている

★主にあって「聖め」の過程を歩んでいる信徒に対して、汚れることすべてへの警告

なぜ分かたれることが必要か？

1. 神が要求される信徒の性質

2. キリストの再臨の約束、一聖さの要求— のゆえ

3. 聖書の命令

★分かたれる必要は、聖書中に記されている

→イザヤ書48：20、ホセア書14：8、黙示録18：4ほか

★神の民イスラエル、カナンの地で異教の諸国民と交わらないようにと警告された

★神のご命令に不従順な者たち、懲らしめを受ける

→民数記33：50-56

☆キリストの教会も、キリストと使徒たちの教えを拒み、異なった「福音」を語る者たちから分かたれなければならない

→16：17-20、ヨハネ第一4：6

: 18「わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる…」：

★この世の友となることは、神の敵になること

→ヤコブ4：4

極端論は有害

☆キリスト者は、修道院生活をするように召されたのではなく、キリストの「証人」となるように召されている

☆信徒の行為の基準は、規則ではなく原則

(1) 信徒の行為は、神の栄光のため

(2) 信徒の行為に悪の介在を許さない

(3) 信徒の行為は弱いキリスト者をつまづかせてはならない

7章

: 1「愛する者たち…神を恐れかしこんで聖さを全うしようではありませんか」（下線付加）：
キリスト者の聖め/聖化の過程

☆内なる聖所での対処法

(1) 否定的な感情、欲望、行為が生じたら、その存在をすぐ認識し、対処する

★それらを神に向ける

★神と二人だけのとき、自分の感情を自由に表現する

★神に、そのような感情をあおっている根本的な原因を暴いてくださいと願う

(2) そのような否定的な感情保持に対し、自分に責任があることを告白する

★悔い改める道を選ぶ

★他人を無条件で赦す

(3) 否定的な感情だけでなく、その根本的な原因をもすべてを神に明け渡す

★神は、ご自分を求める者と和解してくださる

(4) 神の言葉に浸る

★嘘を取り除き、真理に置き換える

★あなたの心を占めていた自己中心な生命は、

神の生命、一神の愛、神の考え、神の力— に満たされる

→これが信徒の聖めの過程

聖書

- : 2-5 「私たちに対して心を開いてください…私はあなたがたを大いに誇りとして…」 :
 *パウロ、コリントの教会の大変な不道徳を指摘、それに対処するよう命じ、
 彼らはそれに答えた
- : 6-7 「しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は…私たちを慰めてくださいました…」 :
 *6-8節から、パウロがエペソを旅立った後、テトスの報告を待っていた間に経験した
 感情の起伏が手に取るように伝わってくる
- : 8 「…私はそれを悔いていません。…悲しませたのを見て、悔いたけれども」 (下線付加) :
 *ギリシャ語には「悔い改める」に対する二種類の用語がある
 ここでは①「後悔する」を使用
- : 9 「今は喜んでいますが…あなたがたが悲しんで悔い改めたからです…」 (下線付加) :
 *ここでは、②「人を変える心の大きな変化」を表す用語「メタノイア」を使用
 「…私たちから何の害も受けなかった…」 (下線付加、新改訳2017) :
 *9節の最後の文は、この訳のほうがよい
- : 10 「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない…悔い改めを生じさせ…」 (下線付加) :
 *下線部は②「メタノイア」使用
 *全能者の訓練を悔ってはならない、神は傷つけるが、傷を包んでくださる方でもある
 →ヨブ記5:17-18
 「世の悲しみは死をもたらします」 :
 →Cf.箴言27:6
- : 11 「…みこころに添ったその悲しみが…どれほどの熱心を起こさせたことでしょう…」 :
 *コリントの教会、愛に根ざした熱意によって罪を犯した信徒に処罰を断行
- : 12-14 「ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが…真実となったからです」 :
 *愛が基盤
 *パウロがテトスに「あの厳しい手紙」を持たせて、コリントの教会に送り出したとき、
 パウロがコリントの教会について確信をもってテトスに話した通りに、
 まさにそのように、ことが進行したことに、パウロ、ここで言及
- : 16 「私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せることができるのを喜んでいますが」 :
 *『コリント人への手紙第一』は、教会内に「ねたみや争い」と分裂があったことを反映
 *しかし今、パウロにとってコリントの教会は「すべてのことに信頼できる」状態
 *悔い改めを通してのリバイバル
 →信徒は聖書的な愛で問題に対処し、神のご介入を求めなければならない